

二つの中華文明

松浦 純子

二十一世紀に入って間もなく中国政府は「中華文明探源工程」というプロジェクトを発表し現在も進めている。その過程で陝西省の黄土地帯にある万里の長城近くの榆林で、巨大都市の石峁遺跡セキほうが発見された。ここで暮らしていた人々は万里の長城が建設される以前に北方の遊牧民と交易していたようだ。この遺跡は黄河文明の終わり頃から夏王朝の初め頃のものだと言われている。

私が高校生の時は、中国文明といえば黄河文明だけで、長江文明の記述はなかった。ところが一九七〇年代以降、長江下流域で河姆渡遺跡や良渚遺跡などが発見され、長江文明の存在が明らかになった。これらは紀元前五〇〇〇年頃から紀元前三〇〇〇年頃の遺跡だと考えられているが、資料によって誤差がある。また、四川省では不思議な青銅の仮面が出土した三星堆遺跡も発見された。

一方、黄河文明にも二十世紀後半に新しい発見があり、殷墟より古い二里头遺跡が発掘され、夏王朝の首都ではないかと推測された。殷の存在は十九世紀末に偶然発見された甲骨文字の解読から、司馬遷が著した『史記』の殷に関する伝承は史実であることが証明された。同様に司馬遷は夏王朝についても記述している。爵と呼ばれる青銅の器などが出土したが、残念ながら文字が書かれた文物はまだ遺跡から発見されていない。

長江文明は黄河文明と同じころ成立したが、黄河文明の方が多く研究されてきた。これは中国の統一王朝が十四世紀成立の明以外、みな華北（黄河やその支流域）に首都を置いていたからであろう。つまり華北は支配する側、江南（長江中流・下流域）は支配される側という対立構造があった。春秋時代に江南の楚の覇者は華北の周王に対抗して王と名乗り、また楚の項羽と関中（華北の西安周辺）を手に入れた漢の劉邦との対立も有名である。さらに、中国を常に脅かしてきたのは北方の遊牧民であり、その対策が万里の長城建設であった。首都から遠い南方の長江流域には歴代の王朝は関心が薄かったのだろう。